

事業報告書（令和6年度）

事業名 自然体験を通して心を育てる事業

団体名 みんなの家

担当者名 平野 桂子

※活動の様子がわかる写真と説明を必ず添付してください。

1. 活動内容（日時、場所、参加対象者、人数、内容等）

■日時 2024. 09. 15.

■場所 みんなの家

■参加対象者 地域の親子（4家族の参加 大人5名、子ども9名）

■内容 親子でのコミュニケーションを大切にしながら、土を触り、作物を植え、自然と触れ合うことで、子どもの情緒を育て、親子の心の絆を深める。

自然栽培をされている講師を招いて、食育や農業について学ぶ（秋ジャガイモを植えた）



■日時 2024. 11. 30.

■場所 みんなの家

■参加対象者 地域の親子（7家族の参加 大人9名、子ども14名）

■内容 親子でのコミュニケーションを大切にしながら、夏に植えた秋ジャガイモの収穫を行い、ジャガイモの生育について、手で触れ、目で見、五感で感じ学ぶ（秋ジャガイモの収穫）

2. ESD の視点

① 事業を通じて、参加者にどのような気づきや意識・行動の変容があったか

普段の生活の中で、親子で自然に触れ合う機会を作ることが難しいからこそ、今回の秋ジャガイモを植え、収穫するという親子での共通体験を通して、子ども達の「やってみたい！」という好奇心や意欲を引き出し、大人達がその子どもの思いに共感することで、親と子の心の通ったコミュニケーションを図ることができ、子どもの自己肯定感を高めることに繋がったと考えられる

(実際に参加者の方から、いつも子どもにガミガミ言ってしまうけれど、優しい気持ちになることができ、我が子のありのままを受け入れてあげたいと感じたという感想を頂いた)



現代の子ども達の遊びの中心であるゲームと離れた時間を作ること、自然に触れ、五感から得る実体験から、「やってみたい!」「楽しい!」「おもしろい!」という心が感じる感性や情緒を育み、「順番を守る」「譲り合う」という人間社会で必要なルールや約束を大人に指示されるのではなく、子ども達のやり取りの中で学ぶ機会となった。

自然栽培をされている講師の方を招いて、お話を聞き、人間も自然の一部であり、共生共存していくことの大切さを学ぶ機会となった。

② どのように学び合いを取り入れたか

・自然栽培(無農薬、無肥料、焼きすくも、竹パウダー使用)の講師の方に直接秋ジャガイモの栽培方法を習い、実践することで、親子での農業についての学び合いの機会となった。

・親子で自然に触れ、五感から得る感性を大切にすることで、親子双方の心に余裕が生まれ、素直な言葉かけをすることができる。人間関係の核である親と子の関係を、心の通い合ったものにすることができるよう、まず親達が生きて大切にしたいことの共通認識を図った。

・通っている学校、保育園、幼稚園ではない新しい関係性を作ることができ、尚且つ異学年の交流の機会になり、視野の広い人間関係を築いていく



子ども達が安心して感情や感性を表現することのできる場所というのは、学校生活や個々の家庭の中では難しいと考えている。だからこそ今回の企画は、子どもの情緒を育み、安心感や自己肯定感、親子の絆を高めるのにとっても有意義であったと感じている。

自然に触れ合う機会の少ない現代の子ども達に、地球に負担をかけない無農薬、無肥料で作物を育てるという意義を伝える場を提供することができた。

当初収穫したジャガイモをみんなで調理をすることも目標にあげていたが、収穫した 2.3 日後にジャガイモが青くなってしまい、腹痛、下痢や嘔吐などの食中毒を引き起こす可能性があると考えられたため、調理を中止とした。

事業内容に変更があったが、親子で自然に触れ合い、普段触れることの少ない土いじり体験の中で、子ども達の好奇心が育ち、自然の中で五感から得られる情緒を育む機会となった。事業の目的と取り組みの成果を得られたと感じている。



③ どのような学びと実践を結び付ける工夫を行ったか

秋ジャガイモを植え、収穫するという工程を通して、親と子の触れ合いを中心とし、大人が子どもに指示をするスタンスではなく、子どもの自由意思、自発性、好奇心を最大限に認め、見守り、共感するという関りを大切にしていける旨をお伝えし、理解を得て、共通認識を持つことができるよう工夫した。



親と子の共同の共通体験を通して、お父さんやお母さんに自分の気持ちに共感してもらえる「絶対的安心感」と「自己肯定感」を育むことができる雰囲気づくりを行った。

年齢や立場の関係のない大人同士が心を開き、素直な気持ちで関わる機会により、精神的な孤立を防ぎ、人と人とが繋がる安心感を感じられるよう工夫した。

3. 取組の成果（事業計画書に記載した事業の目的・目標をどのように達成できたか。事業を実施してどのような成果があったか。）

秋ジャガイモを自然栽培で植えて、収穫するという企画を実施することにより、自然と触れ合う体験を通して、「頭」で考える「思考」ではなく、五感優位の「心」が感じる「感情、感性、感覚」を活性化する機会となり、親と子との笑顔を引き出すことができた。

（現代人は自分が感じる感性や感情よりも、～でなければならないという思考が優位になっており、このバランスが崩れていることが多いと考えられる。この「頭」と「心」のバランスが崩れると、生きづらさを感じてしまう）

実際に子どもたちが使ったことのないショベルや鍬などを「使ってみたい！」という積極的な声とともに、普段では興味を示さないような事柄であっても、他の子ども達がしているのを見て、やるという行動に移るという相乗効果もあった。

また大人がルールを守るよう指示するのではなく、年長の子どもが率先して、年下の子ども達へ声掛けする姿も見られ、子ども達の関係性の中でルールを守る大切さを教え合うことができていた。（異学年、異学校の交流の場となり、友人関係が広がった）

参加された大人同士で、子どもの心を育てるためにはどのような関わり方が必要なのか等子育てについての話をする機会となり、なかなか人には言えない悩みや思いを共有することのできる第三の場所としてのコミュニティ作りに貢献できた。（孤立を防ぐことの目的達成とする）

4. 今後の課題と展望（事業がどのように岡山地域の ESD の取組と持続可能な社会づくりの発展・継続につながるか）

作物を植え、育て、収穫するという一連の工程は、自然と共生共存することと同じで、「生きる」ということを学ぶ機会となった。

自然を大切に思う心というのは、座学で学び、頭で考えて育つものではなく、心が感じるもので、内側からの発露であり、それこそが命（自然）を尊いと感じられるために必要なこと。心からの発露こそ、感性、感覚、感情という「その人らしさ」である。

だからこそ、このように親子で自然と触れ合い、心から素直になれる機会が大人にも子どもにも必要不可欠で、地域で子どもを育てるという視点を軸に、今後も子育て世代が孤立を感じることがないようにこのような自然を通じた体験型の親子で参加できるイベント企画、居場所づくりを通して、人と人との繋がりを持つ機会を継続していく必要があると感じている。

人と人々が安心して暮らすことのできる地域づくりには、まず「人の心の豊かさ」や「安心感」が重要である。人はどのような関係性に心を開き、安心することができ、信頼することができるのか？親からのどのような言葉かけや態度で、子どもの自己肯定感が育つのか？このような視点から、いかに大人も子どもも精神的な孤立を防ぎ、人と人々が信頼し合い、繋がっていくことができるかということが日本社会の課題ではないだろうか。